

『直指伝』翻刻と考察

——『三冊子』を視野に入れつつの再評価——

復本 一郎

『直指伝』なる俳論書がある。安永甲午（三年）五月の紫江坊栢舟の序、同年同月の二柳庵三四坊の跋を付して、安永四乙未年（一七七五）正月に刊行されている。出版書肆は、京寺町二条下ル町・野田治兵衛、江戸室町三丁目・須原市兵衛、大坂心斎橋南壹丁目・石原茂兵衛の三書肆（合梓）である。従来「『三冊子』から剽窃した跡が多い」（昭和三十二年刊『俳諧大辞典』の尾形仿氏による『俳諧直指伝』の項）、「大半は『三冊子』からの剽窃である」（平成七年刊『俳文学大辞典』の東聖子氏による『俳諧直指伝』の項）等、その評価は高くない。小稿では、特に『三冊子』とのかかわりを視座とすることによって、俳論書としての『直指伝』の再評価を試みんとするものである（結論を先取りして述べておくならば、本文の正確さ、内容の的確さにおいて、『三冊子』解説に資するところ、すこぶる大であると言えるのである）。

ちなみに、板本『三冊子』は、安永五丙申年（一七七六）の半化房蘭更の序を付して出版されているが、刊記は

記されていない。出版書肆は、江戸・西村源六、伊州・内神屋三四郎、京・井筒屋庄兵衛、野田治兵衛、西村市郎右衛門、吉田九郎右衛門の六書肆である。野田治兵衛は、『直指伝』と『三冊子』の両書の出版にかかわっているわけである。ただしこの安永五年版（あるいは、刊行は、六年か）『三冊子』の板木は、「為_ニ祝融氏_ノ所_レ奪_ハ。」（瑞馬の跋文参照）、すなわち、板木が火災によって焼失し、享和元年（一八〇一）辛酉春、再刻版が、生々庵瑞馬の跋文を新たに付して刊行され、この書が大いに流布したのであった。享和版『三草紙』（『三冊子』）の出版書肆は、大坂心斎橋筋・奈良屋長兵衛、京寺町押小路上ル・橘屋治兵衛、井筒屋庄兵衛、同三条寺町西江入・菊舎太兵衛の四書肆である。享和版は、安永版を板下として、被彫_{カボセボリ}したものである。

すなわち、『三冊子』が板本によって流布したのは、まずは安永五年（一七七六）、ないし六年のことであり、『直指伝』の刊行より一兩年遅れているということなのである。ということは、『直指伝』は、『三冊子』の内容の一部を、剽窃か否かはしばらく措くことにしても、いちはやく不特定多数の読者に伝えたということであり、この一点のみにおいても、十分に評価されなければならないのである。加えて、その本文、内容がいかに『三冊子』の解説に有効であるかを、本文の翻刻、紹介の後に述べてみることにしたい。

翻刻に先だつて、板本『直指伝』の書肆を私の架蔵本によって簡単に記しておく。『直指伝』。半紙本（縦_{タテ}二二・一_{センチ}、横_{ヨコ}十五・九_{センチ}）一冊。序二丁、目録二丁、遊び紙二丁、本文三十丁、跋二丁、刊記。表紙は、縹色_{はなだ}に芭蕉葉の空押し模様。題簽_{だいせん}は、中央に紅梅色後題簽枠無し短冊（縦十五_{センチ}、横三・二_{センチ}）で貼付、墨書。「直指伝 全」。内題「俳諧直指伝」。

そこで翻刻であるが、翻刻にあたっては、表記を原則的に現行の字体に改め、筆者によって句読点、濁点、振り仮名、傍点等を施した。原本にも、一部に濁点、振り仮名が施されているが、それらと私に施した濁点、振り仮名

との区別は、煩雑さを避けて、あえてしなかった。ただし、片仮名の振り仮名は原本のものである。章段の頭に、便宜、私に通し番号を付した。

一 『直指伝』本文の翻刻

直指伝序

いでや、物の多く類ひせる中にも、硃石^{マシロシ}は、玉に似て、玉にはあらざる也。鰲牛^{アメウシ}の黄なるは、虎に似て、虎にはあらざるなり。才は人をもて殊なれば、はせをの翁の示し給ふける種^{クサ}のこゝひも、門人^{おのおの}各みづからのかうがへを雑^{まじへ}て録し、己がむきくの家^{いへ}のつたへとなせばや、村肝の心のくまの百^もくまを、かぎろ火のほのかにも、翁の書には似て、翁の意にはあらざるなり。しかしてより、後の人は、才降^{くだり}、世推遷^{あめ}て、編^{あめ}る書ども沢にありといふども、見るにたる物鮮^{すくな}し。さればこそ翁の伝へ給し書、且^ツ自ら著し給ふ書は、いと得がたく、誰も見まくほしきわざなれ。此^{この}一卷は、みちのく須賀川てふむややぢなる晋流のひめ置^{おか}れしを、僕が若かりし年ごろ、読^{よむ}ことをゆるされ、伝^ツへ膳^{ウツ}し侍りぬ。普流は、其角の門人なり。晋叟云、この書は、翁世にいまそかりける時、其角、嵐雪がともがらに、口づから説^{とき}給ふ事どもを聞^き得^うることの差^{ちが}ひもやすると、猶^{なほ}うらもとなくおぼし、みづから書して授^{さづ}け給ふとなり。それよりこのかた梓に行はんとおもひしかど、晋叟の伝言^{ツテゴト}といへども、己がをろかなる意もて極めかね、且^ツあだし名を、估^{ウカ}の譏^{そしり}をはぢしらひ、跡^{アツキ}状^{じやう}もしらに年を経ぬ。爰^{こゝ}に我友二柳庵、この書を読^{アヤツヘ}こと数回、かくて云、此書は文の體^{カラ}を飾らず、また其、嵐の二子の口実^{スサミ}にあらず、心まめやかに、清き水の流れて、石をあらふがごとし。翁の自ら筆をとらして、記したまふに疑ひなき物なり。をしむべし、玉を洩に潜めんことを。我請^ヒ得^{あづ}て梓^{あづ}に鑲^{ちりば}め、同じ志なる人くおしひろめん。此端を記せよと、あやに求めらる。僕、文に拙く、いなめども、ねもごろに

吹^{ミハヤ}挙げせば、げにや晋叟の意にもかなはめ、と庵主の言を因^{ヨスガ}処として、終にうけひにたり。此書、もと標^{ナツキ}題を記されず。巻の中に直指の文字もあれば、素書に倣^{なら}ひ、こを直^タに題目として、伝来の由縁を、聞るまゝにしるすことしかなり。

安永甲午五月

紫江坊栢舟誌



俳諧直指伝目録

- 1 変化之事
- 2 俳諧濫觴
- 3 連歌の式権輿
- 4 俳諧字義
- 5 変風俳諧の弁
- 6 誹言の弁
- 7 心の俳諧詞の俳諧の弁
- 8 俳諧式の事
- 9 恋旅の句の事
- 10 本歌用捨
- 11 本歌を取と証歌に引と差別の事

- 12 輪回の事
- 13 等類の事
- 14 切字の事
- 15 文章の事
- 16 句合判者の事
- 17 懷紙表裏用捨の事
- 18 一卷句容の事
- 19 賦物の事

俳諧直指伝

芭蕉庵桃青述

晋其角編集
三四坊校合

1 変化の事

大をいへば天地の変化、小をいへば人間の盛衰、俳諧にも古今の変化あり。一卷は小天地の変化にして、百韻百色にかはり、流行する也。^{なり}文章といふも変化の上手にうかぶをいふ。或は虚、或は実、自在に優游す。歳次に寒暑なきときは、陰陽鬱滞して万物生ぜず。食物も五味を和せずば、人をやしなふ事あたはず。人の行事も僻ごとあるを、諷諫せずば和する事なし。左伝に齊の晏子の和と同との格言あり。はいかいの一卷もかくのごとし。人よき句をせば、やり句にて変化すべし。ひたぶるに変化することにもあらじ。年中の変化の毎年同じきがごとし。強て奇異をもとむべからず。

2 俳諧の濫觴^{らんしやう}

俳諧は、歌なり。歌は、天地開闢の時よりおのづからあり。陽神^{オガミメカミ}陰神、礮馭^{オノコロシマ}盧嶋^{ロシマ}に天降まして、先陰神^{まつ}、喜哉遇^{ウマシアヒ}三可^{ミカ}美少男^{ヲトコ}と宣ふ。陽神は、喜哉遇^{ニメ}三可^{ミカ}美少女^{ヲトメ}と唱^{となへ}給へり。是は歌としもなけれども、心に念ふ事、言に出る所は、則^{すなわち}歌なり。故に、是を歌の始とする也^{なり}。神代には文字の数もさだまらず、人の世となりて、素盞^{すさの}尊よりぞ三十一文字となれると也^{なり}。猶、古今集の序を見るべし。素盞^{すさの}雄尊は、天照太神の兄なり。女と住たまはんとて、出雲の国に宮造りし給ふ時に、其処に八色の雲のたつを見てよみ給へるなり。

八雲たついてもやへ垣つまごめに

やへ垣つくるそのやへがきを

日本記を按ずるに、景行天皇四十年冬十月、日本武尊^{やまとたけのみこと}東征し給ふ。蝦夷^{エミ}すでに平らぎ、日高見国^{ヒタカミクニ}より帰り給ひ、常陸を経て、甲斐に到り、酒折の宮に居たまふ時に、拳燭^{ヒトモ}して進食せらる。この夜、歌を以侍者^{もつてサムラヒヒト}に問て曰へにひばりつくばをすぎていくよかねつる。諸侍者^{モロくサムラヒヒト}、答る事あたはず。時に秉燭^{ヒトモシ}者在て、御歌の末に続て歌て曰へか、なべてよにはこゝのよひにはとをかを。即秉燭^{すなはち}人の聡明^{サトキ}ことを誉給ひて、腆^{アツ}くめぐみたまふ。釈日本紀に云、是連歌の濫觴なり。

業平、伊勢国かりの使の時に、斎宮、

かち人のわたれどぬれぬえにしあれば

といふ句に、

またあふ坂の関は越なん

其益につい松のすみして歌の末を書つけるとなり。是等は、正しき連歌のはじめなるべし。

3 連歌の式の権輿けんよ

後鳥羽院の御宇、禪阿弥法師セウリン小林、連歌の去嫌、其外句の法式を作れり。其後九十年ほどへて、建治二年に連歌式目、為家卿作りたまふ。禪阿弥の作れる法式は聯句の法より取しとなり。

4 俳諧字義

黄門定家卿の云、利口也なり。物を誑アサむきたる意成べし。心なき物にこゝろを付つけ、物いはぬものに物いはせ、利口したる体なり。

韻学などにも、鄭啓が詩語、多く俳諧といへり。俳は戯タハムレなり、諧は和ヤワラなり。唐にもたはれて作れる詩を俳諧といふ。滑稽とは、滑ハはナメラカなり、稽ハカルは計也なり。酒器の名也なり。和語の唇口ノミクチのこと也なり。滑稽、猶俳諧ともいへり。漢の東方朔、本朝の一休和尚など、其人なり。古今集にされ歌を俳諧と定む。是に准なぞらへて、連歌のたゞごとを俳諧之連歌といふ。ツラネウタ

5 変風俳諧の弁

世に俳諧といふことはじまりて、代々利口タハルのみに嬉游タハルる故に、其名世に高しといへども、如何にぞ世人詞のみをもつてかしこき道に入いるべけんや。予、この道に游あそぶこと三十余年、初て其実を得たり。名は往昔の俳諧を倣かといへども、心は往昔の俳諧にあらず。されば、俳諧の名は伝はりて、其そのこゝろを用ひず代々空しく推遷モトメることは、いかにぞや、爰こゝをもつて予常にいふ、俳諧に古人なし、と。去ながら、古人のあとを踏ふて覓モトメざれば、復変風の理は識サトしがたし。今おもふ処の境にも、此後何人か出て是を撓タメん。我唯後世を畏オソルるなり。むかしより詩歌に名ある人多し。

皆その実より出て、実をたどるのみ。我は実なき物より実をもとめんと思へり。

6 俳言の弁

連俳元一つ也。^{なり}意詞ともに連歌あり、俳諧あり。心は連俳に修れども、詞は連と俳とに別れ、昔より沙汰し置る事どもあり。俳言といふは、音に^{フシ}いふ物は都て俳言也。^{なり}連歌に出る音の物もあれども、俳言也。屏風、几帳、拍子、律の調子の類、例ならぬ、胡蝶の類也。^{なり}千句連歌に出る鬼、女、龍、虎、其外^{そのほか}千句物の詞は俳言なり。連歌に嫌ふこと葉の桜木、飛梅、雲の峰、霧雨、小雨、門出、浦人、賤女などの詞、無言抄にも紹巴の聞書にも余多見へ侍る。かやうの類皆俳言なり。

7 心の俳諧詞の俳諧の弁

名にめでゝおれるばかりぞおみなへし

われ落^{おち}にきと人にかたるな

此歌は、僧正遍昭、嵯峨野にて落馬しける時読るなり。古今の俳諧の手本也。^{なり}詞いやしからず、心のざれたるを上、の句とし、詞のいやすく、心のざれざるを下、の句とする也。^{なり}ころのおかしき体は、俳諧本意也。^{なり}又往古の俳諧歌、雑体余多あれども、まめやかにおもひ入^{いり}たる体は、

思ふてふひとの心のくまごとに

立かくれつゝ見るよしもがな

冬ながら春の隣のちかければ

中垣よりぞはなは散ける

又曰、春雨の柳は全体連歌也。なり田螺取鳥は、全体俳諧なり。タニシとる

春雨に鳩のうき巢を見にゆかむ

といふ発句は、こと葉に俳諧なし。浮巢を見に行む、といふ所が心の俳優なり。

霜月や鶴のつくぐならびゐて

冬の朝日のあはれなりけり

といふ脇句は、心詞ともに俳諧なし。発句をうけて、一句のごとくいひなしたる所が俳諧也。なりはいかいは心にあり、こと葉に有、あり此句のごときの類、作意にあり。一條におもふべからず。

又曰、詩歌連俳ともに風雅は一也。なり詩歌連のいひ余すこと、葉迄も、俳はいはずといふ事なし。花に鳴うぐひすも、餅に糞する椽の先とまだ正月もおかしきこの比を見とめ、水にすむ蛙も、古池に飛込水の音といひ放して、草に荒たる古道の中より蛙の飛入響に俳諧の実情あり。とびこむ

8 俳諧式の事

俳諧の式は、連歌の式に效ひて、先達の沙汰しけるなり。連歌に新式あり、追加ともに二條摂政良基公の御作也。なり今案は一条禅閣の御作也。なりこの三つを一部としたるは、肖柏の作なり。連に四とある物を、俳には五とし、七句去物をば、五句去とし、俳諧なれば万事やすくとさたしけると也。なり今案の追加に漢和の式あり。是を大概俳諧の法式とむかしより定置也。さだめおくなり貞徳の御傘、其外世に多し。是等の式、信用しがたき事有。あり俳無言といへるあり。大様よろし。去嫌もなくては、調ひがたし。自門にも一書あれかしといへるものもあれども、慎むべき所なり。法式を

定むるといふことは、甚重きことなり。されども花の本と称せらるゝ上には、其法立ずしては、其名の詮なし。代くに歌数多あれども、世人是を用ひざるは、何の故ぞや。私に法を作りて世人に是をまもれとは、恥べきの事也。差合の事は、時宜にも依べし。先は大かたにして、宜なり。もし志ある門弟子は、直指の趣を書記して、竊に自門の法ともなさば成べし。

9 恋旅の句の事

恋の句、昔より二句付ざれば拾ず。むかしの句は兼日に恋の詞を多く集置、その詞をつづり、句となして、こゝろの恋をば問ざるなり。恋は別して大切也。作意易からず。宿昔、宗砌、宗祇の頃迄、一二句にて止事あれば、其例なきにしもあらず。此後、門弟子議して、一句にても置べきか、又、前句恋とも恋ならずともさだめがたき句ある時は、かならず恋の句を付て、前句ともに恋に取成べし。かやうの時は、此句のみにして、其次は恋句を付るに及べからず。新式にもこの御沙汰あり。しかれども、恋句は分て其座の宗匠に任すべし。

旅の句、連歌には三句つゞきしかども、二句にて拾てよし。神祇、釈教、恋、無常の句、旅にて離れし所多し。当流には旅、恋難義にして一トふし此所にあり。連歌の教には、旅体の句、たとへ田舎の句なりとも、心を都に通はし、山坂を越、淀の川船に乗心もち有て、都のよすがをもとむることろなどを本意とすべし、と也。俳諧の心得は、少しく趣意異なり。たとへば、東海道も見ざる人の風雅は覚束なし。

10 本歌用捨

新式目曰、新古今以後の作者を用ゆべからず、となり。八代集は古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、

新古今これなり也。

新勅撰、続後撰二代を加へ、十代集を本歌に取。又、堀川兩度の作者、上の十代の外たりとも、仮令、集に入ぬ歌なりとも、作者の吟味有てもちゆ、となり。後普光恩院の近代風躰に、日本歌には、堀川院の百首までを取べし、たゞし、今は金葉、詞花、千載、新古今などをとりたらんは、何か苦しかるべき、此分、古左府へも申侍るなり。連歌には、新古今迄をも取也。証歌には、近代の歌よみの歌をも用ゆるなり。定家卿詠歌大概に曰、詞不可出三代、先達之所用、新古今、古人之歌可同用之。

11 本歌を取と証歌に引と差別ある事

新式目曰、人の普くしらざる歌をば、付合にこれを好むべからず。ことに依て証歌には引用ゆべし、となり。本歌を取といふは、古歌の詞を取合せて付るをいふ。証歌は、聯違ひあり。或は一句の余情、或は名所等に続合たる物を付るをいふなり。証歌は、いづれの集にてもあるべき事なり。

12 輪回の事

新式に曰、薰ものなどの句に、こがるゝと付て、又、紅葉を付べからず。舟などを付べし。こがるゝといふ字、かはる故なり。或説に、夢といふ句に面影と付て、又、月花を付る事、面影物といふて、近代これを付ず、といへり。更に其理なし。曾以きらふべからず。又、花の付句に、風とも、霞とも付て、又、後の花の句に同物付べからず。たとへ句数を隔といへども、一座にこれをきらふべし。他、これに准ず。又、竹といふ句に、世を付て、再竹の句いづる時、夜の字をも付べからず。斯のごとき類は、遠輪回なり。又、嵐といふ句に、山を付、其次に富士など付

れば、取成様にて打越に返るなり。これらの類を嫌ふ。他、これに准ず。一卷の中に似寄たる句をきらふべし。これ遠輪回なり。

13 等類の事

等類は、固く犯すべからず。他の句より、先我句に我句等類なる事をしらぬものなり。よく思ひ分て味ふべし。若我句に障る他の句ある時は、かならず我句を戻るべし。趣向に表と裏との事あり。句にもよるべしとはいひながら、大やう述して等類になさず取べし。古き連歌にへ思はぬ方にちらす玉章、といふ前句にへ山かぜの枝なき花をおくるらむ、と付たり。この句、山風の枝なき花を送ること、全く散たる体にて、前句と同意の連歌とて、其頃さたしけるよし。また、

都をば霞とゝもにいでしかど

あきかぜぞふく白川の関

みやこにはまだ青葉にて見しかども

紅葉散しくしら川の関

この歌、往昔より色を分ちたる作意に依て等類を遁れたりといひ伝ふ。さも有べし。私に憶ふに、頼政の歌は、卯月の頃みやこを出て、十月のころ白川に致、紅葉の散しきたるを見て、能因法師の歌を思ひ出し、其歌の妙絶をいよく感得したるといふ意より詠ぜし歌なるべし。これにて等類をよく遁るゝといえり。

14 切字の事

むかしより用ひ来る文字をもちゆべし。連俳の書にくわしく記てある事也。切字なくては、発句の姿にあらず。付句の体なり。さりながら、切字を置ても、付句の姿あり。誠に切たる発句はすくなし。定まれる切字はなくとも、切る句あり。其分別、切字の第一なり。其位は、自然と発明せざれば知がたし。猶伝法あり。

あこくその心はしらず梅の花

といふ発句をして、切字を入れる事を按ぜしに、傍にありし其角いへるは、この発句は切字なくても切るやうに侍るなり、といふ。いかにも切るなり。たしかに入たる切字なれども、初心の人のまどひに成侍るべし。これらの切字は、初心を教ふる法にあらず、まして、させる事もなき句は、その発句をおもひとゞまるとも、常に嗜むべし。

15 文章の事

惣名を文章といふなり。○序に、由序、来序、内序の三体あり。由は起るよしを書、来は是より前の事を書、内は其書の中の事を書なり。此三体を一つにして序一つに書事もあり。○跋は、ふみとゞむるなり。序あつて後の跋なり。序も、跋もその書所は同じ。跋は、序より猶くわしく書べきもの也。跋とゞまりて委するの意なり。序跋ともに年号、月日を書事也。○文章に五字、七字と書は、長歌の格なり。五七三など、地盤の詞を乱に書には、或は対ある処には、かならず対を置、或は故事を置ときは、故事の対、野山、水辺、景形等いづれも対を置事、同前也。○詞書の書法、和文には習ひなし。漢文には其斐もある事のよし。○記は、其物を記すの意なり。その格は、序跋に同じ。意の違ひのみなり。○銘は、其物に銘する意也。其格、前に同じ。本意の違ひのみなり。○賛は、ほむる詞なり。譬ば、山吹に発句する時は、山吹をほめて賛する也。凡、文章は、四文字くくに書こと大形の格なり。

16 句合判者の事

衆議判と書は、連中会合して詮議、批判するを云なり。蛙合、衆議判の格なり。故に、判者も睨となし。本判といふは、判者、必序にても、跋にても書なり。且又、句引までも付るなり。歌に歌合あり。是に格を效ふ。即興の判あり。兼日の判あり。即興の判は、左右に文台を立て、判者あり、難陳有て、判者これを聞、それにもかゝわらず、判を書也。卷頭は、多くは持のものなり。

17 懷紙表裏用捨の事

百韻、本式なり。以下、五十韻、歌仙等は、皆撮略の義なり。連歌の古式は、表十句、名残の裏六句。月七句去、花裏表に一本づゝ有。表の中に必名所一句あり。今も清水連歌は、斯のごとし。古法表十句の例をまもりて、八句の後、二句過るまで表に嫌ふものゝ類を、連歌にはいまに到る迄せず。俳諧には許すべきか。連歌に龍、虎、鬼、女、さし出たる類は、表のうちに嫌ふ。俳諧にも鬼女はなりがたし。龍、虎は、苦しからずとなり。去ながら、句の主には成がたし。その外、人を殺、斬、縛る等の類、用捨すべし。是等は、百韻中一句に過べからず。或問、恋の詞、述懷の類、祝言にいひ立たる句は、表の中いかゞ侍らん。答て云ク、句に依べし。文字は苦しからず。仮令祝言にいひなすとても、人の上にいふは、いよく述懷なり。花の淋しきの類は、苦しからず。崩れし壁にさがるゆふ顔などは、全く貧家を移す句なれば、用捨すべし。他人の句は、咎むまじ。又問、恋、無常、其外、表に嫌ふ故事、本説を下心に持て自地にいひ顯はさず、他の物のうへに仮用ひたるなどの句の類は、如何侍らん。答て曰、大かたは表にきらふべし。事にも依べきことながら、いづれとてもかならず嫌なり。たとへ詞に出さずして、内心に嫌ふことを畜たるは、作者淨からず、心汚穢。一向うち出ていひたるかた然るべし。されども表にあらざればく

るしからず。表に打出せといふにはあらず。又問、古今の人名、表に出す事如何侍らん。答て曰、今の人名は慎むべし。古人の名は、ものによりて苦しかるまじ。されども、このみては無用なり。必きらふべし。猶口伝あり。又問、懷紙に恋句なくては叶はざる事か。是を好む由縁はいかに。答て曰、この事は至て大切の事なり。懷紙に恋句を大切に目立る事は、神代陰陽和合欲供交合より、豊葦原草創し、其例なり。恋なくてはかなひがたき事なり。つゝしむべし。

18 一卷句容の事

一卷は、旅路のごとし。一步もあとへ帰るべからず。行に随ひ意のあらたまるは、唯前へ行こゝろなればなり。発句の事は、一座の巻頭なれば、初心は遠慮すべき事也。八雲御抄にも其沙汰あり。句の容も長高く、位宜しきをすべし、とむかしよりいひ伝ふ。懷紙の発句は、軽きを以よしとす。時代にも依べき事にや侍らん。往昔より新宅の会には、燃る、焚るなどの火の噂、追悼に闇き道、迷ふ道、罪科、船出に帰る、沈む、浪風等の類、忌憚るべき心づかひあるとなり。五体不具の噂、一座に差合事おもひめぐらすべし。発句にかぎらず、その心もちあるべし。脇句は、帝主の作ること、往昔よりいひ伝ふ。しかれ共、首尾にも依べし。客発句とて、往昔は、かならず客より其日の挨拶の発句を出す。脇も答るがごとくうけて、其挨拶を付侍りし事也。雪月花の事のみいひたる句にても、挨拶の意なり。発句三季に渡る景物のいづる時は、脇句にて当季を定むべし。発句に神祇、釈教、其外一事一曲ある時は、脇句もそれに応じて付べし。たとへ詞に出さずとも、心にはあるべし。水祝ひなどの季取一遍なる発句には、脇句に恋なくても有べし。発句にも依べし。対付、違付、打添付、挨拶付、比留の類、むかしよりいひ伝ふ所なり。第一、発句をうけて、つりあひ専に打添て付るをよしとす。句中に作意を好む事あるまじ。留り字は、韻字

の居りよろしくすべし。手尔波留、自然にあり。二句一意の付方にして、応対付、対付の意と思ふべし。脇句の心得べきは、先発句出ると、能聞しめ、させる事なくとも、脇より句意を顯はす様に挨拶してよし。能聞ふせず、心とゞかざれば、無礼にして、無下なる事也。留を韻といふは、文字にて留るゆへ也。聯句の脇句は、対也。此格に倣て韻字留といふ。

第三は、大付にても、転じて長高くすべし。古法には、留りの事沙汰なかりしに、心敬、宗祇の頃よりの格式なり。疑ひの切字ある発句の時は、第三、反字に留ず。疑ひの句は二句去ゆへ也。覧は、疑ひの反字なり。句中に押へ字あり。や、か、何、いつの類、諸書にいへるがごとし。又、句に依て押へ字なくとも反る事もあり。一字反なり。をらん、ちらんの類也。発句哉留の時は、第三にて留せずともいひ伝ふ。是治定のかななる故にせずと也。はなのさかり哉、月の光哉、の類なり。盛にて、光にて、といふにかよふ故也。にてにならぬに留はくるしからず。にて留は、嫌ふべし。文字留、手尔波留、希に有。古法の相伝あり。一説に、古書曰、脇句、韻字留故に、第三、文字留並ばざる様に留なり。若脇、手尔波留ならば、第三、文字留共いふ。是懷紙に並ばざる様の書法也。斯の如きは、老巧達人にあり。初心は常の留をよしとす。是の道の習ひ也。第三は転ずるを専とすれども、脇の句にも依べし。脇句、違付、取成付等にて、発句に離る時は、第三転ずるにおよばず。第三転ずる由来は、発句、神祇、釈教、恋、無常等の句なれば、脇もそれに応ずるゆへに、第三に至、これをかならず転じ、離れて付ることなり。

四句目は、往昔より四句目ぶりなどいひて、やすくと軽きをよしとす。重きは、四句目の体にあらず。脇とひとしく、句中に作意をもとめず、故事、本説などを嫌ふ事なり。又、四句目にて春秋の季を続け、月花の句を付る事、かならずあるまじき事なり。

五句目、七句目の事、三て五覧など、いふ古説あり。七句目も同じこゝろ得なり。第三後は、一順に上の句を賞翫

とす。中にも月の座は、名ある所なり。老者に當べし。表に同字を嫌ふも、懷紙を嗜む故なり。て留、反留は、句法の一体、表道具なり。

初裏に至ては、四春八木とて、連歌に古説あり。四句目春を出さず、八句目高き裁ものを出さず。花に室る遠慮なり。俳諧にも其心得也。他の句は、返すに及ばず。春季出なば、花を付べし。是を呼出しの花といふなり。花の前句に秋句を遠慮すべし。恋の句の花はむつかしき態とて連歌は秘して、前句よりつゝしむとなり。俳諧は、其さたなし。

月の定座をこぼす事、五十句より内には有べからず。奥に至て、三の折末にはすこし興にもなるものなれば、希に、月をこぼす事もあり。是も定例にてはなし。歌仙には、月をこぼす事、くるしからず。元来、略式なるが故也。月の座に、月の字も、有明もさし合たる時は、異名にてすべし。实名のしかたは、人々の作意にあるべし。月は、上の句を賞翫とす。落月、無月の句は慎むべし。時にも依べし。法にはあらず。

星月夜は秋季にて、賞翫の月にはあらず。若発句に出る時は、素秋にして他の季の有明などの句を出すなり。月といふ字は、五句隔と新式に見へたり。月二句表に稀にあり。この時は、月数八つなり。名残の裏は、稀にも月なし、となり。

花四本の内、下の句は一句ばかりなどあり。稀にも定座をこぼす事なし、となり。或は、賞翫の花の句、前句への付意か。又、其一句の意か。その実は梅、菊、ぼたんなどを下心にして仕立正花となしたる句は、其草木にしたがひ季をさだむべきか。或問、正月に花を見る、九月に花咲などいふ句は、何と諷ふべきや。答て曰、正月の花は陽春の美名なれば、子細なし。九月にはなきなどいふ句は、非言なり。なき事也。名木を隠して、花といふ句はあるべし。花は桜のことながら、總て春花をいふ。是等を正花にせずしては、花の句多く出るゆへ、反りて賞翫軽し。

宗祇時代迄は、百句に花三本、雨一つなり。宗長の時に至て、香にほひの花一本、雨一つ、勅許かうむを蒙り度、奏問せられて、花四本、雨二つには極り侍るなり。

名残の裏一順も、初裏のごとく軽かろくとあるべし。一節一曲ある句は、名残の裏の体にあらず。句並を追にも及ばずとなり。

揚句あけくは、付つかざるがよし、との古説有あり。今一句になり、一座退屈して興醒る故也。又、兼て案おくじ置とも云いひ。発句の主、又亭主のする所にあらず。はじめの一順に執筆しゅひつの句なくば、揚句を執筆にさすべし。発句に有文字あるを用ひず、となり。相伝かひは斯のごとしといへども、賀筵、追善等の曠ひらなる会の懷紙などには、其座、その巻の模様により、発句の主しゅに句くひの花の句をも所望する事あり。かやうの時は、かならず発句に心のかよふ花の句を付つけるなり。香にほひの花の一曲なり。かゝる花の句出ては、揚句も亭主に所望あれば、おのづから脇句の意に通ふ句を付つけることなり。又、初裏の花の句、主、句くひの花をも所望することもあれば、或は咲散さくちる、或は前の花を合せ二本一本の曲巧をつくすことあり。常ならぬ句くひの花の句なる故、それをうけて付つけることなれば、其座の宗匠、巧者に所望することあり。かやうの事は、変例にして、式法にあらず。此事ありとは心得こころえ置べし。常の会席には、古来相伝の趣にしたがふべし。句くひの花とは、式の会に称すべし。常の会には、名残の花と称すべし。猶口伝あり。

揚句の大事は、句くひの花にて春季五句に満みつるとも、揚句にその季を放すべからず。たとへ春季六句に及びても、其季を續くべし、と也。いづれの季にても、恋句にても、揚句は此このころへは、句くひの花にむすぶ付方なり。句容心くぶりこころ得有えあるべし。

賦物の権輿は、神道より出て、連歌にはこれを取、神威を仰ぎ清しめたまふことのよし。俳諧はしからず。元来、平俗の言語にあそべば、句の幹も鄙事に多能なるもの、故に、薰猶錯雜清浄といふべからず。故に賦物を取ことなきも、神秘を可畏しての事也と、先達既にいましめ置給へり。予これを仰ぎ膽敬して、是を遠ざくるのみ。しかれども、他門の交會に應へざるも、亦礼を失ふことなり。知りて用ひざるは、偏僻の譏なからん。依て、ありのすさびに、初学の耳にちかきを挙るのみ。予も真理をしらず。かならずよ、こゝに引る句をよきといふにはあらず。唯、模様の雛形と思ふべし。

上何 何下 一字露頭

二字返音 三字上略 同中略

同下略 四字上下略 五字上中下略

一字借音 二字除偏 同除冠

同他添

此外にも、巧者、作意をいしなく取ことのよし。然れども、一字露頭の外、俳諧には取べからずと也。凡、俳諧の賦物は、さだまれる文字あらざれば、唯発句に随ひ何なりとも興ある文字をとるべし。両韻に通ぜざる文字を取ること也。

上賦 何茶

はつ花や目ざまし草の朝朗

これは、朝茶と取たるなり。発句の中の朝といふ字を、何と上に置たるなり。或説に、摠て連歌に紛はしき文字を取べからず、といへり。

下賦 餅何

これは、餅花と取たる也。句中の花の字を、何と下に置なり。右の二句にて上何、何下と取様准へてしるべし。一字露頭

なげかじな寝ぬはうき世の子規

これは、寝を音と取たるなり。句中の興字を一字取て、別の物に頭はす也。氣を木、名を菜、羽を齒に頭はす事、余は准へてしるべし。

二字返音

籠で買そらねも高し時鳥

是は、句中のきすを返して杉と為たる也。音を返すこと、何によらず斯のごとし。作意有べし。

三字下略

月は一つ影は眼数の詠め哉

是は、句中のひとつの文字を略すれば、人の字なり。上略、中略、四字上下略、五字上中下略も同心得なり。別に取様、引句に及ばず。余は准知べし。

一字借音

白雪は山の額の化粧哉

是は、句中のけしやうのけ文字を借て、毛と聞きむるなり。句中の音を一字借て、此方に賦べき物の名を偏くしるゝ様にすべし。訓に唱ふるものに聞きむべし。一字露頭に似たれ共、音を借と、直に訓を露との差別なり。よく味ひ知べし。

二字除偏

龍門ならで都へのぼれ鱈の魚

これは、句中の鱈の字を、偏を除のぞけば、雪の字になる也。なり或は、松の字の木偏を除ば公になり、明の字の日偏を除ば月になるの類、皆此心得也。このころえなり

同佗添

うぐひすやよむ歌毎にはね題目

是は、句中の毎の字に木偏を添れば梅の字になって、鶯に似合しき文字になる也。なり此外に、猶作意に依より、いろくの賦物あり。家くの宗匠の流に依ては、取様に違ひあり。

一 百韻の俳諧には一字露頭の外取ほかとるべからず。

一 凡、賦物、神祇、賀筵、追福等の座興に取事也。とるなり

一 賦物取様、数多ある事は、千句万句に取ときの古法なり。常は取ものにあらず。

一 千句発句、数十句也。なり春三句、秋三句、夏二句、冬二句なり。十句の中、一句は名所あり。又、なきもあり。
好に依このみよる。又、花の通題、月の通題あり。

一 千句の時は、習ひあり。発句の切字、脇第三、各希奇。メツラシキ切字も留り字も有べし。ある若、発句に賦物を取ときは、
同じ賦に取とるべからず。千句は伝授なき人有。あり成がたし。連衆も巧者を撰ぶべし。

一 巻頭の発句は、たけ高き発句を本意とす。小點たる発句は、かならず無用の事也。なり題も初春、霞、鶯、梅の類
よろし。めづらしくせんとて、俗過たる題などは、巻頭の発句に努ゆめくあるべからず。

跋

芭蕉
之流

世尊、金婆羅華を拈たまへば迦葉笑ひ、夫子、一貫すれば曾子唯す。此書や、むかし、はせをの翁、武の深川に
ませしとき、両の手に桃と桜の花を拈て、其嵐の二士につたへ給ふけるよし、誠に俳諧の正法眼蔵と謂つべし。さ
れど、此書、世に稀にして、其有事をだにしれる人なし。然るに、紫江老人、壮年の頃、其晋子のながれよりつた
へて、久しく其家に十襲せられしが、此頃、かつて予に見る事をゆるされて、巻舒、手のおくことをしらず、つらく
これを閲するに、誠に其文の淳朴なる、其教の親切なる、古翁の筆授、まがふべくもあらねば、あながちに乞得て、
これを梓にし、これを公にせんとす。さは、翁の驥尾に付て名望を世に求めんとはあらず。これたゞ翁をしたふ
て翁に逢ざる同志のために、いさゝか利益せんとするのみ。これをよまん学者、何ぞ翁に逢ざるを恨とせん。巻中
なを口伝多し。伝あらば、正に其蘊奥を得ん。惟安永三甲午のとし夏五月某日

二柳庵

三四坊誌

三四二柳
房庵

二柳庵蔵板

二柳庵
蔵書

安永四乙未年正月

京寺町二条下ル町

野田治兵衛

江戸室町三丁目

須原市兵衛

大坂心齊橋南壹丁目

石原茂兵衛

二 『直指伝』の素性^{すじょう}

まず、公刊に携わった人々から解決しておくことにする。安永甲午（三年・一七七四）五月の年号、日付で序を書いている（本文15に「序跋ともに年号、月日を書事也^{かきごとなり}」と記されていることを遵守しているわけである）のは、紫江坊栢舟である。栢舟については、『俳文学大辞典』（角川書店、平成七年十月刊）の加藤定彦氏執筆の「栢舟^{はくしゅう}」の項によつて、そのアウトラインを知り得ることができる。生年は、宝永四年（一七〇七）の由。とすると、『直指伝』の序を書いた安永三年（一七七四）は、六十八歳ということになる。享年は、未詳の由。馬光門。序を執筆した折は、大坂住。俳論書『俳諧六指^{はいかいむっゆび}』（明和五年序、明和七年跋）がある由であるが、未見。序文と同じく安永三年五月に跋文を書いているのは、二柳庵三四坊。これも、『俳文学大辞典』を繙^{ひもと}き、田中道雄氏の執筆になる「二柳^{じりゅう}」の項によつて、アウトラインを見ておくことにする。享保八年（一七二三）に生まれ、享和三年（一八〇三）に没している。享年八十一。希因門。『直指伝』の跋を書いた折は、大坂住。田中道雄氏は「書肆石原茂兵衛（五晴）の俳書出版にも協力して、中興運動を大坂^{（マヤ）}で担った」と記しているが、『直指伝』の出版にかかわった三書肆の 하나가石原茂兵衛であること、右の翻刻の通りである。板本『三冊子』の安永五年（一七七六）付の序を書いている半化坊^{はんけふ}闌更^{らんどう}とも、同じ希因門ということもあり、交流がある。ちなみに闌更は、享保十一年（一七二六）に生まれ、寛政十年（一七九八）、七十三歳で没している。もう一人、『直指伝』出版に携わった人物で、三書肆の中の一、野田

治兵衛は、板本『三冊子』の出版にも携わっているので、この人物にも注目しておいてよいかもしれない。橘屋治兵衛とも。俳諧書林。

そこで、いよいよ序・跋を通して『直指伝』の素性を追ってみることにしたい。架蔵本の書誌については、すでに小稿冒頭に記しておいたので参照されたい。『国書総目録』によれば、現在、架蔵の他に京大頼原文庫、富山県立図書館志田文庫、天理図書館綿屋文庫（二本）に蔵されていることが判る。一つだけ加えておくならば、架蔵本巻末見返部分の刊記の箇所には「二柳庵蔵板」の下に^{蔵書}二柳庵の朱印が押されているのである。「二柳庵蔵板」と同意かあるいは二柳の手沢本であつたということを示す蔵書印であるのか。手擦れの跡が著しい。二柳の愛読書であつたことも想像されるのである。

最初に注目すべきは、栢舟の序の中の左の箇所である。

此書、もと標題^{ナツキ}を記されず。巻の中に直指の文字もあれば、素書に倣^{なら}ひ、これを直に題目として（以下略）。

『直指伝』（『俳諧直指伝』）は、本来の書名ではなかった、ということなのである。この記述は、本書の存在の信憑性を考える上で意外に大きな重みを持っているように思われる。本来は、伝芭蕉執筆の無書名の俳論書であつたというのである。その書に『直指伝』なる書名を付したのは、誰か。ほかならぬ栢舟であることを、栢舟自身が告白しているのである。この誠実な態度は、該書に対する栢舟の信頼から生まれているのであろう。栢舟の命名の拠つてきたところの記述は、「俳諧式の事」（8）の条の左の部分である。

差合^{さしあひ}の事は、時宜^{よる}にも依^よべし。先^{まづ}は大かたにして、宜^{むべ}なり。もし志ある門弟子は、直指の趣^{かきしる}を書記^{ひそ}して、竊^{ひそ}に自門の法ともなさば成^{なる}べし。

ここでの「直指」は、俳諧式に対する芭蕉^{みづか}自らの折々の指導、といった限定された意味での用法であり、必ずし

も一書全体を統べるにふさわしいような使用例ではないが、栢舟は、「直指」本来の意味、すなわち端的な本質把握の指導の意、として拡大して流用、書名としたのであろう。小稿でも、本書を便宜的に『直指伝』と呼称するが、本来は、無書名の芭蕉俳論書であつたということは、十分過ぎるほど注意しておいてよいであろう。

そこで、本書（『直指伝』）の伝来の経路である。栢舟は、まず、

此一卷は、みちのく須賀川てふむまやぢなる晋流のひめ置れしを、僕が若かりし年ごろ、読ことをゆるされ、伝へ膳し侍りぬ。

と記している。この「晋流」とは、誰か。これも『俳文学大辞典』によつて横井博氏執筆の「晋流」の項を見てみることにする。延宝八年（一六八〇）に生まれ、宝暦十一年（一七六一）に八十二歳で没している。その著『蕉門録』は、よく知られている。生まれは、上州（群馬県）。後、須賀川（福島県）住。栢舟は、須賀川の晋流のもとで、『直指伝』を披見、書写したというのである。それが、いつの時期かは定かでない。栢舟は「若かりし年ごろ」と言っている。栢舟の序は、さらに次のように続く。

晋叟云、この書は、翁世にいまそかりける時、其角、嵐雪がともがらに、口づから説給ふ事どもを聞得ることの差ひもやすると、猶うらもとなくおぼし、みづから書して授給ふ、となり。

この部分あたりから、記述がやや曖昧となつてきて、一書の信憑性に、残念ながら翳りが差してくる。栢舟がこの序を書いている安永三年（一七七四）の時点で、晋流はすでに没していて、没後十三年が経過している。栢舟と晋流との年齢差は、二十七歳。「若かりし年ごろ」の栢舟は、晋流を「晋叟」と呼んでいるのである。問題は、ここからである。晋流の言によれば、芭蕉は、当初、『直指伝』の内容を、其角、嵐雪に口述筆記させようと思つたが、正確さを期して、自ら筆記したというのである。「みづから書して授給ふ」とは、同内容の『直指伝』を其角と嵐雪

それぞれに、ということなのであろうか。晋流は、其角、嵐雪、双方と交流があつた（『蕉門録』参照）。『蕉門録』の臍人序に「筈月洞の主人（筆者注・晋流の別号）、元禄のころより凡耳順の歳月を蕉門に遊んで、晋子（筆者注・其角の別号）の腸を探り、四時折々の景物に流行して蕉門録の一集なりぬ」と見えるように、そして寛延四年（一七五一）の自跋に「芭蕉二祖晋門 藤晋流自跋」と見えるように、晋流は、其角門。とすると、栢舟が晋流のもとで披見した『直指伝』は、其角所持の伝芭蕉自筆本を筆写したものであるということになるのであろうか。「晋流のひめ置れしを」の書きぶりには、原本そのものであるような響きもある。このあたり、杳ようとしている。

栢舟の序は、『直指伝』の信憑性を次のようにも記している。

我友二柳庵、この書を読むことアマタ、ヒ数回、かくて云、此書は文の體カラを飾らず、また其、嵐の二子の口実スサミにあらず、心まめやかに、清き水の流れて、石をあらふがごとし。翁の自ら筆をとらして、記したまふに疑ひなき物なり。をしむべし、玉を測に潜めんことを。我請アツキと得て梓あづきに鏤ちりばめ、同じ志なる人々におしひろめん。

二柳に『直指伝』の信憑性を語らせているのである。二柳披見の書は、栢舟筆写本。それゆえ、二柳は、その内容より判断して、「翁の自ら筆をとらして、記したまふに疑ひなき物なり」との結論を導いているのである。其角や嵐雪による潤色は施されていないというのである。出版に踏み切ったのが二柳の意志であることも明記されている。二柳の跋も、右のことを明らかにして、序跋、呼応している。

つらくこれをけみ関するに、誠に其文の淳朴なる、其教そのの親切なる、古翁の筆授、まがふべくもあらねば、あながちに乞得こひて、これを梓にし、これを公にせんとす。

なお、二柳は、本書の筆写、伝来の過程を「紫江老人、壮年の頃、其晋子のながれよりつたへて、久しく其家そのに十襲せられしが」と記しているので、芭蕉→其角→晋流→栢舟→二柳と理解していたことがわかる。

序跋の検討は、これで了^おえる。ただ、公刊した二柳が、本書を「芭蕉庵桃青述 晋其角編集 三四坊校合」としているところは、何とも釈然としないところである。「芭蕉庵桃青述」ではなくして、「みづから書^{きづ}けて授^{さづ}けふ」たものではなかったのか、「翁の自^{みづか}ら筆をとらして、記したまふ」たものではなかったのか。「晋其角編集」の「編集」とは、どのようなことだったのか、「三四坊校合」の「校合」とは、どのようなことだったのか、等々である。

三 『直指伝』の内容

それでは、伝来に曖昧さがあることを承知しつつ、次に進んで、『直指伝』とは、どのような内容の俳論書であったのであろうか。すでに小稿の冒頭で述べておいたように、土芳の『三冊子』と深いかわりを有しているのである。

土芳の著作とされている『三冊子』は、『白^{しろ}雙^{さうし}紙』『赤^{あか}雙^{さうし}紙』『わすれみづ』（板本では『黒^{くろ}さうし』）の三部より構成されている。土芳の自筆本『三冊子』は、目下のところ出現していない。富山奏氏の編になる『校本 三冊子』（和泉書院、昭和五十八年十一月刊）は、伝存する諸本の中の芭蕉翁記念館本、梅主本、石馬本、安永板本の四種を対校したものである（富山奏氏は、芭蕉翁記念館本の本文を高く評価されている）。伝本は、この四種に限られるものでない。日本古典文学大系『連歌論集 俳論集』（岩波書店、昭和三十六年二月刊）中の「俳論集」の〈解説〉において、井本農一氏が詳しく触れられているが、氏は、特に上野図書館蔵本（現国会図書館蔵本）の本文に注目されている。第一部から第三部までの三冊を『白^{しろ}雙^{さうし}紙』『赤^{あか}雙^{さうし}紙』『わすれみづ』（『黒^{くろ}さうし』）が、それぞれ占めるわけであるが、その内容関係は、必ずしも一致していない。例えば、芭蕉翁記念館本の第二部の『赤^{あか}雙^{さうし}紙』の内容が、安永板本の『黒^{くろ}さうし』に該当するといった具合である。ただし、第一部に据えられている『白^{しろ}雙^{さうし}紙』の内容は、

諸本いずれも一致している。このあたりにも『白雙紙』の性格が窺知し得るかもしれない。いずれも師芭蕉の説を祖述するという形態を採りながらも、他に比べて、『白雙紙』が一番体系的であるように思われるのである。

そして、今注目している『直指伝』の内容が、この『白雙紙』と重なるのである。すなわち、右に翻刻した『直指伝』の一番最初に置かれている「変化之事」(1)の章段と、一番最後に置かれている「賦物の事」(19)の二章段を除く全十七の章段が『白雙紙』と重なるのである。配列も、まったく同じである。ただ、『三冊子』(『白雙紙』)が師説を祖述するかたちを採っているのに対して、『直指伝』が芭蕉その人の述作というかたちを採っているので、語り手の違い(土芳か、芭蕉か、という)は、当然、細部において顕在化している。

右の翻刻において、私は『直指伝』の本文に傍点を付した。その傍点箇所が、『白雙紙』の本文と大きく異なる箇所であり、それゆえに『白雙紙』の解説に資するところ大であると思われるのであるが、詳しくは、節を改めることにしたい。

四 『直指伝』の本文の正確性

従来、先にも述べたように、尾形仿氏や東聖子氏によって、『直指伝』は、『三冊子』の「剽窃」ということで片付けられてきた。「剽窃」とは、他人の文章などを盗んで捏造することである。とすると、捏造者は、誰か。晋流か、栢舟か、二柳か。この三人の中の一人か、あるいは、何人かでの共犯ということになる。となると、三人の中の一人か、二人か、三人かは、『三冊子』(『白雙紙』)の本文を読んでいたことになるのである。が、『直指伝』は、少なくとも現存する『白雙紙』とは別種の伝本に拠っていると思われるふしがあるのである(一部後述する)。となると、「剽窃」説は、該当しなくなるのである。ルーツが芭蕉であるとすれば、芭蕉の時代に『白雙紙』と同内

容の伝書が門弟間に密かに流布していたとしても、何の不思議もないのである。「赤双紙、白双紙」とて翁の口伝を土芳にとどめ」（鳥酔「伊賀実録」）、「この書は土芳の聞書なり」（石馬本『三冊子』石馬前文）、「白双紙、赤艸紙、忘水の三冊は、親弟土芳、祖翁の膝下に在て、示教の金言を手づから書写すもの也」（猿雖本『三冊子』蝶夢奥書）等の言説も、すべて後代のものである。木吾著、安永三年（一七七四）成立の『もろつばさ』に、

赤双紙、白双紙といへる書、此地に残れりと聞く。今猶存せりや、と問。答、是は土芳が、その世にまのあたり翁に聞けりし聞書にして、文庫（筆者注・再形庵）に有。他見を堅くゆるさずと。

と見えるも、これも後代の資料である。芭蕉と同郷伊賀上野の高弟（親弟）土芳に対して、芭蕉が、特に目を掛けていたことは、間違いない。が、其角や嵐雪も、芭蕉が若き頃からの子飼いの愛弟子である。『白雙紙』の内容が、土芳のみに伝授されたと考えることのほうが、不自然なのではあるまいか。先にも述べたごとく、『白雙紙』と同内容の伝書が、土芳も含めて、高弟の間に、秘かに秘伝書的な相貌を帯びて滲透していたのではあるまいか。土芳も書写、入手する機会を得、その『白雙紙』に刺激されて、折々の断片的な師説の聞書きをまとめて、それぞれ『赤雙紙』『わすれみづ』（『黒さうし』）としてまとめた——これが現存する土芳の『三冊子』なのではあるまいか。

今日までの、『直指伝』に関しての最も詳しい論考は、田中道雄氏の『二柳の俳論』（大谷篤藏編『近世大阪藝文叢談』、中尾松泉堂、赤尾照文堂、昭和四十八年三月刊、所収）である。田中道雄氏は、二柳の他の俳論書『俳諧二十五箇条短綆録』等に目配りされながら、『直指伝』を、内部徴証的に、二柳の『白雙紙』の「改竄」による偽書と結論し、二柳俳論書の一つとして位置付けておられる。「改竄」、公刊に至るいきさつについては、

支考系の『二十五箇条』に対し、蕉門二大支流の他の一たる其角系に伝わる『二十五箇条』があり、『白双紙』はこれと関連ある其角の聞書と信じたのではあるまいか。恐らく栢舟は『白双紙』だけを入手したのであろう

が、前半俳諧本質論・後半連句作法論を成す『白双紙』の大まかな構成が『二十五箇条』に似る点も、二柳に
そう思わせたのであろう。

と述べられた上で、

上坂三年目、闌更、麦水等希因門諸家の論書出版に刺戟を受けていた二柳が、栢舟の資料提供を受けて一書編
纂を目論見、かねて意を致すところを行間に折り込む——真相はかくのごとくではあるまいか。

と結論されている。田中道雄氏が述べられるごとく、『直指伝』中にて用いられている「諷諫」の語一つをとって
ても、『直指伝』に二柳色は認められるであろう。「三四坊校合」なることを明記しているところにも、二柳の「意
を致すところを行間に折り込む」姿勢が窺知きちされるかもしれない。が、それは「改竄」と呼ぶべきものではなく、
『白雙紙』と内容を一にする芭蕉伝書（すなわち原、『直指伝』の真摯な読みとして評価されるべきものだ）、私に
は思われるのである。「改竄」とは、自分の都合のいいように内容を書きかえることの意にほかならないからであ
る。

*

そこで、まずは『直指伝』の内容の正確さに注目してみることにする。

『直指伝』の中の「俳諧の濫觴」（2）中に左の箇所がある。

日本記を按ずるに、景行天皇四十年冬十月、日本武尊やまとたけのみこと東征し給ふ。蝦夷エゾすでに平らぎ、日高見国ヒタカミノクニより帰り給
ひ、常陸を経て、甲斐に到り、酒折の宮に居たまふ時に、拳燭ヒトモして進食ミケせらる。この夜、歌を以もつて侍者サムライヒヒトに問て
曰いへにひばりつくばをすぎていくよかねつる。諸侍者モロ／＼サムライヒヒト、答る事あたはず。時に秉燭者ヒトモシ在て、御歌の末に続て
歌うたひて曰いへかゝなべてよにはこゝのよひにはとかを。即秉燭人すなはちサトキの聡明サトキことを誉給ひて、腴アツくめぐみたまふ。釈

日本紀に云、是連歌の濫觴なり。

この部分、土芳の『白雙紙』（便宜的に石馬本による。以下、『白雙紙』の引用は、同じ）には、

日本武尊東夷せいばつの下向、吾妻の筑波にて、

新針つくばをこへて幾夜かねぬる

と仰られければ、

かゝなべて夜には九夜日には十日よ

と火燃しの童の次侍る。是連歌の起とすといへり。

と記されている。この繁簡の差は、何に由来するのであろうか。『直指伝』が、『白冊子』に拠っていないことだけは、明らかではなからうか。内容的には、『直指伝』のほうが豊饒、かつ正確である。これをしも『直指伝』が『三冊子』（『白雙紙』）の「剽窃」、あるいは「改竄」と言うのであろうか。晋流、栢舟、二柳のいずれかによる（田中道雄氏に従えば、二柳の可能性が最も高い、ということになるが）『白雙紙』の「剽窃」「改竄」と見るよりも、彼等が披見した伝芭蕉自筆本系の伝書が、伝存の『白雙紙』の諸本とは別種のもので、と見るほうがはるかに自然であろう。が、このサンプルは、二つの本文があまりに違い過ぎるので、二著作の関係を考えるには、あまりふさわしくないかもしれない。別のサンプルを示そう。『直指伝』中、「俳諧式の事」（8）の章段の左の箇所注目してみよう。

連に四とある物を、俳には五とし、七句去物をば、五句去とし、俳諧なれば万事やすくときたしけると也。

短い箇所なのでわかりやすいであろう。この部分、『白雙紙』（石馬本）では、

連に五と数あるものは、四つとし、七句去るものは五句となし、万俳諧なれば事をやすく沙汰しけると也。

となっている。「連に四とある物を、俳には五とし」とは、連歌における「一座四句物」についての記述である。ちなみに、肖柏の『連歌新式追加並新式今案等』を繙くならば、「一座四句物」(百韻の中で四回の使用が許されているもの)として「雪、有明、関、氷、鐘、空、宮、朝、夕、鳥、火、玉、葉、寝、天、屋、戸」等が挙げられている。俳諧においては、これら連歌の「一座四句物」は「五句」に緩和されているのである(貞徳『俳諧御傘』参照)。それゆえ、『白雙紙』(石馬本)が「連に五と数あるものは、四つとし」と記してしまうと、意味をなさなくなるのである。この箇所、『白雙紙』の諸本、芭蕉翁記念館本は、「連に三つの数ある、四つとし」、梅主本は、「連に三つの数あるを、四つとし」、安永板本は「連に三と数ある物は、四とし」と、それぞれなっていて、石馬本以外は文意が通じるのである。上野図書館本(現国会図書館本)は、『直指伝』同様「連に四と数あるものは、五つとし」とある。『直指伝』の拠った本文が、正確であることが納得し得るのである。この箇所に限らず、『直指伝』の本文は、上野図書館本(現国会図書館本)と一致するところ少なくないが、今は省略する。——この一例をもってしても、『直指伝』は、『白雙紙』の本文校定に参考となることが、十分に窺知し得るであろう。

五 『直指伝』の内容の的確性

次に『直指伝』の本文が、『白雙紙』の本文の内容を的確に読み解くために、すこぶる有効であることを、これも一、二の具体例によって示してみることにはしたい。先の「連歌の濫觴」の箇所で見たととき、事実の指摘で、『白雙紙』解説に資する箇所、少なくないが、それらはひとまず除いて、内容理解にかかわる記述に注目してみることにする。

まずは『直指伝』中「恋旅の句の事」(9)の章段中の左の箇所である。

連歌の教には、旅体の句、たとへ田舎の句なりとも、心を都に通はし、山坂を越、淀の川船にのる乗心もち有て、都のよすがをもとむるこゝろなどを本意とすべし、と也。なり俳諧の心得は、少しく趣意異なり。たとへば、東海道も見ざる人の風雅は覚束なし。

『白雙紙』（石馬本）の、この箇所は、

旅體の句は、たとひ田舎にてするとも、心を都にして、相坂をこへ、淀の川舟にのる心持、都の便求る心など本意とすべしとは、連歌の教也、とあり。又、東海道の一すじもしらぬ人、風雅に覚束なし、とも云り、と有と記されている。従来、連歌の旅論に続けての芭蕉の言葉「東海道の一すじもしらぬ人、風雅に覚束なし」が、文脈的にかなり唐突の感がするのを否めなかった。が、『直指伝』のごとく「俳諧の心得は、少しく趣意異なり」の一文を中に入れると、途端にこの一条の不自然さが解消されるのである。すなわち、連歌の旅の句があくまでも「本意」中心主義であるのに対して、芭蕉俳諧の旅の句は、脱「本意」、すなわち体験主義だといふのである。その意味での「東海道も見ざる人の風雅は覚束なし」であり「東海道の一すじもしらぬ人、風雅に覚束なし」だったのである。「俳諧の心得は、少しく趣意異なり」との一文は、本来、原『直指伝』に備っていたものか、第三者によって加えられたものなのか、定かでないが、いずれにしても『白雙紙』の件くだんの一条の解説に大きなヒントを与えてくれるのである。

続いて『直指伝』中の「一卷句容の事」（18）における冒頭の一条に注目してみよう。

一卷は、旅路のごとし。一步もあとへ帰るべからず。行にしたが随ひ意のあらたまるは、唯ただ前行いくこゝろなればなり。

『白雙紙』（石馬本）には、左のごとく記されている。

師のいはく、たとへば歌仙、三十六歩也。なり一步も跡に帰る心なし。行にゆくしたがひ心の改あらたまは、たゞ先へゆく心な

れば也。^{なり}

「たとへば歌仙、三十六歩也」^{なり}との芭蕉の言葉は、よく知られているが、「一卷は、旅路のごとし」との譬喩の方が面白いし、説得力もある。こんな芭蕉の遺語の見える伝書が秘かに流布していた可能性を、即座に否定してしまい、第三者による芭蕉遺語の捏造ということで、簡単に片付けてしまったてよいのであろうか。『直指伝』が其角系の伝書であったとしても、その内容からして、芭蕉とのかかわりを全否定はできないように思われるが、いかがであらうか。

もう一例だけ見ておくことにする。このサンプルは、大いに注目していい。これも『直指伝』の「一卷句容の事」(18)中の左の一条である。

或問、正月に花を見る、九月に花咲^{さく}などいふ句は、何と説^{あつか}ふべきや。答て曰、正月の花は陽春の美名なれば、子細なし。九月にはなきくなどいふ句は、非言なり。なき事也。^{なり}

『白雙紙』(石馬本)には、次のごとくある。

或は、正月に華をみる、また、九月に花咲^{さく}など云^{いふ}句、いかがと云^{いへ}ば、師のいはく、九月に華咲くなどいふ句は非言なり。なき事也。^{なり}

この『白雙紙』の不可解さも、先の『直指伝』の一条で氷解してしまうのである。『白雙紙』の諸本は、いずれも「正月に華をみる」との間には、答えていないのである。明らかに、本文の脱落であらう。対して、『直指伝』には、芭蕉の解答「正月の花は陽春の美名なれば、子細なし」が明記されていたのである。これ一つをもつてしても、『直指伝』の資料的価値は、無視し得ないであらう。決して『白雙紙』の「剽窃」、あるいは「改竄」として一蹴し得ないのである。

今は、これ以上にサンプルを挙げて忽卒の間の焦雑な考察を続けることを控えるが、私が翻刻本文に付した傍点部を中心にして、子細に本文を辿っていくならば、『白雙紙』解読への多くのヒントが得られると思われるのである。私が『直指伝』を再評価するゆえんである。

(平成九年(一九九七)五月五日了)